第４学年「社会」学習指導案

授業者　佐藤　孔美

２月１７日（金）３階Ｂ室　１０：００～１０：４０　　話し合い　１０：５５～１１：４５

１　題材名　　「公立図書館はどうあるべきか」～本来の「公共」の役割・あるべき姿とは～

２　題材について

（１）【場面設定】:「時事的な社会事象について，他者との差異や葛藤を生じる問題」を扱う内容

「今，話題となっている図書館の変容は，これからの公立図書館のあり方としてよいのだろうか。」

（２）本題材と子どもたちとの関わり

今回，子どもたちに紹介する事例は，他県のＴ図書館である。2013 年に開館したＴ図書館は，図書館・書店・カフェが一体的に融合した斬新な図書館である。管理を民間に委託（指定管理者制度）し，閉館時間は延長され，休館日はなくなった。市民にとっては，サービスが向上し，とても利用しやすい図書館に生まれ変わった。以前は閑古鳥が鳴いていた図書館だったが，以前の 20 倍もの利用者数が増えたのである。しかし，このＴ図書館と同様の運営方法で図書館を建設しようと考えたＫ市では，図書館建設計画の見直しが市民運動によって提起され，住民投票で見直し票が多数を占めるという事態が生じた。また，Ｏ市では一旦は管理を民間に委託したが，公立図書館の運営は民間にはそぐわないとし，再び市の直営に戻したのである。このように「新しい公共」と騒がれ，もてはやされたＴ図書館の運営方法については，私たちが見えていない問題点が多数存在していることに視点を向けた。Ｔ図書館のあり方は，賛否両論分かれる事例であり，この事例を通して，様々な立場による様々な「判断の基準」（価値観）があることを，新聞等で取り上げられた「論争」や身近な人へのインタビュー，そして子どもたち同士の対話的学びを通して学ばせたい。そして，「多様な価値観の対立の中にあって，何が争点であるかを知ること」を「政治的リテラシー」の中核的な能力と捉え，「争点を知る」を形成していく過程の中で，数多くの「判断の基準」と正対させ，「自分の中にいる異質な他者＝もう１人の自分」に問いかける自分へと自己を成長させることをねらいとした。（育てたい「政治的リテラシー」については p. 87 を参照）

３　学習指導計画（７時間目／全８時間）

０時:「ブック・ウーマン」という本の読み聞かせを行い，「少年はなぜ変ったのか」について考えさせる。
１～２時: Ｔ図書館について紹介し，Ｔ図書館が文京区の図書館と違うところや，その良さを見つける。
３時：「Ｔ図書館は，今後も増えていく方が地域の人たちにとって良いのか」について話し合いをする。
　特別時程（「てつがく」を含む）:「図書館は，私たちにとって必要なのだろうか」
４～６時：本問題に対する様々な声を集め耳を傾け，話し合いを通して，自分の考えを構築していく。
７時:論点を絞り根拠を基に本問題に対する話し合いを通して，本問題の真の「争点」について考える。
８時：「公立図書館とはどうあるべきか」，自分の考えや反論を想定して書くことができる。

４　本時について

（１）本時のねらい

根拠を基に自分の考えを述べたり，友だちの考えに対して質問したり反対意見を述べたりして，何が「争点」かを，見い出していく。

（２）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留　意　点
○課題を確認する。 Ｔ図書館は，今後も増えていく方が地域の人たちにとって良いのか	
★増やしていくべきである ・開館時間の延長や年中無休という点で，サービスが向上している。 ・利用者数が２０倍も増えているのは，斬新さの顕著な例である。 ・この運営方法こそが，まさに「新しい公共」の姿である。 ★増やさない ・図書館には専門的な知識をもっている司書の職員にいてほしい。 ・図書館は本来歴史的・文化的に価値のある公文書の収集・保存に努める場だから，歴史・文化の継承がおろそかになってしまう。 ・図書館におけるサービスとは，図書館の運営方法だけではなく，住民に対する理解が，必要不可欠である。	・この時点では，論点はある程度絞って，話し合いを進めたい。地元の人々の声・新聞記事等全国的な声・小牧市の市民運動の事例・Ｏ市の事例・身近な人へのインタビュー等を活用する。 ・多様な意見や価値観が出てくる中で，「争点」になり得るところは，教員が寄り添い関わりながら形成していく。 ・本来の「公立図書館」の役割・あるべき姿について考えさせたい。

□授業後に話題にしたいこと　子どもたちが，「争点を知る」を形成していく過程の中で，何が根源的な価値観の対立なのかを見いだしていくための，話し合いの工夫や教員の役割は適切だったか。